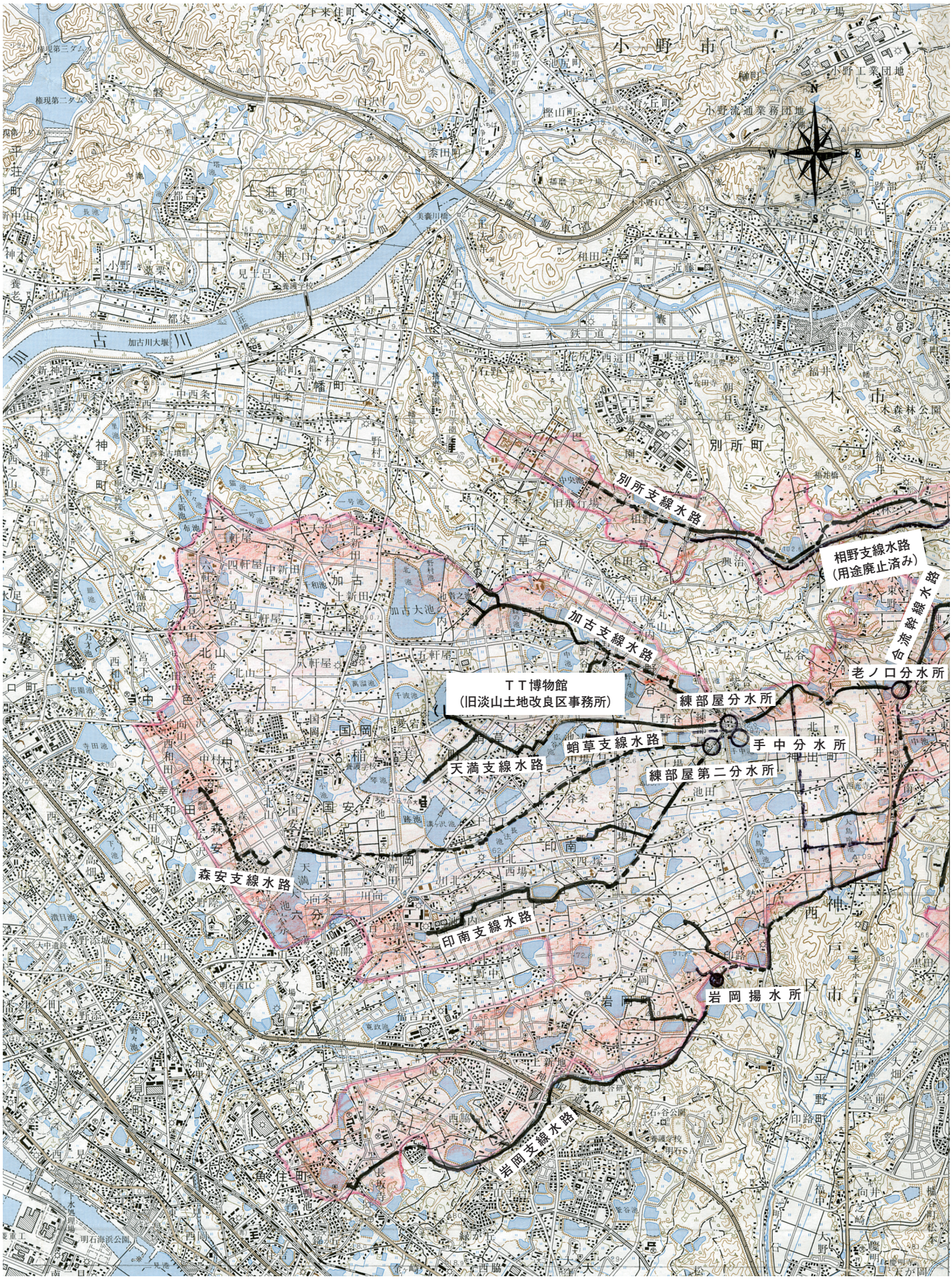
淡山百年の計
古を照らして
今を騰げ
播磨の郷に
豊穣を生まん

揮毫　第四十四代～第四十七代兵庫県知事　貝原俊民

たんざんそすい
淡山疏水平面図



淡河頭首工
淡河川幹線水路
御坂サイフォン
大川瀬導水路連絡水路
広野ゴルフ分水所
宮ヶ谷調整池
山田川幹線水路
広野揚水所
山田池（譲渡済み）
山田川幹線水路
（用途廃止済み）
山田頭首工跡
中央幹線水路
（東播用水）
神出支線水路

東播用水地区県営かんがい排水事業
淡山疏水改修改築工事完成記念碑（加古郡稲美町野寺）

正面全景（淡山疏水・東播用水博物館玄関口）

淡河川疏水が明治21（1888）年から明治24（1891）年にかけて、山田川疏水が明治44（1911）年から大正８（1919）年にかけて開削されました。

この記念碑は、東播用水地区県営かんがい排水事業〔昭和56（1981）年～平成８（1996）年〕で実施された淡山疏水（淡河川疏水・山田川疏水）改修改築工事の完成を記念して平成５（1993）年に建立されました。碑文は、大変な苦労を重ねて淡山疏水を開削した人々と100年近くにわたり淡山疏水を守り農業の発展に尽くしてきた人々を敬い、その先見の明を称えたものです。建立から23年の年月を経て、淡山土地改良区は未来を見据えて東播用水土地改良区との合併を果たしましたが、ＴＴ（淡山疏水・東播用水）博物館の玄関口に鎮座する記念碑は、訪れる人々に「淡山疏水と東播用水の更なる100年」を伝え続けます。

淡河頭首工（神戸市北区淡河町木津）

下流側から見た堰体と土砂吐ゲート

上流からの全景

取水ゲート

淡河川から取水するため、淡河川疏水最上流に淡河頭首工が設けられています。明治 24（1891）年に建設された時には、水を堰き止める石積みと水の取入口があっただけでした。現在では、コンクリート堰と取水ゲートや土砂吐ゲートが設置され、東播用水土地改良区の事務所から遠隔監視・操作が行われています。

淡河川幹線水路上流部（神戸市北区淡河町勝雄）

高台のほ場整備地内を一直線に走る幹線水路（手前下流）

国道 428 号線を渡る水路橋（右上流）

淡河頭首工から練部屋分水所までを、淡河川幹線水路とこれに続く合流幹線水路が結んでいます。その延長は約 20 キロメートル、高低差は約 42 メートルで、平均勾配は 1/5,000 です。淡河川幹線水路上流部は山沿いの高い所を通過し、谷部を土塁水路（土を盛って造られた水路）、水路橋又はサイフォンで渡るなど、下流まで水を送るための高さを保つように工夫されています。頭首工から淡河川幹線水路に流れ込んだ水は、概ね半日をかけて練部屋分水所に到達します。

御坂サイフォン眼鏡橋（三木市志染町御坂）

志染川上流から見た眼鏡橋（アーチの上部をサイフォン管が通過：右上流）

眼鏡橋上部と斜面を下るサイフォン管上流側
（手前下流）

淡河川幹線水路では、三木市志染町御坂の谷を約752メートルのサイフォンが渡っています。これは御坂サイフォンと呼ばれ、イギリス工兵少将のヘンリー・スペンサー・パーマーが設計監督したもので、明治24（1891）年に完成しています。

御坂サイフォンの最低部を支えているのが、志染川を渡るこの眼鏡橋です。練部屋分水所とともに淡山疏水を代表する施設であり、多くの人が訪れて写真を撮ったりスケッチしたりしています。建設当初は石積みのアーチ橋でしたが、昭和28（1953）年に川の下流側にコンクリート橋が増設されています。川の上流側から見ると石のアーチが川面に映り、昔ながらの眼鏡橋となります。

芥子山トンネル（三木市志染町窟屋・青山）

トンネル上流入口（三木市志染町窟屋）

トンネル内部を覆うコンクリート（三木市志染町青山）

三木総合防災公園から緑が丘住宅団地に抜けている芥子山トンネルは、淡河川疏水工事最大の難所であり、一昼夜の掘削長が60センチメートル程度の時もあったようです。完成時は素掘トンネルで、直後に発生した水害の復旧工事で鉄管のトンネルとなり、昭和の県営大改修工事〔昭和24（1949）年～昭和36（1961）年〕によって廃止され、新たな巻立コンクリートトンネルになりました。現在では老朽化による損傷が見られ、東播用水二期事業でこのトンネルも廃止され、すぐ上流から新しい管水路が山田川幹線水路につながります。

廣野ゴルフ場内の幹線・支線水路と宮ヶ谷調整池
（三木市志染町広野・神戸市西区神出町古神）

フェアウェイを横断する神出支線水路（手前下流：三木市志染町広野）

左岸から見た宮ヶ谷調整池
（神戸市西区神出町古神）

宮ヶ谷調整池右岸上流部のゴルフ場
（三木市志染町広野）

廣野ゴルフ場内を４本の疏水が通過しています。淡河川幹線水路と山田川幹線水路及びその支線水路２本です。これら水路の敷地については、元の土地所有者であった九鬼隆輝氏（元三田藩主九鬼隆義氏の長男）との協定により無償使用でしたが、新たに所有者となった廣野ゴルフ倶楽部にも無償使用を認めていただきました。日常の維持管理及び改修工事などにおいても協力をいただいています。

淡河川幹線水路はゴルフ場内で山田川幹線水路と合流し、すぐ下流にある宮ヶ谷調整池につながります。この調整池はゴルフ場の池と一体になっており、大雨の時などには流下してくる水を一時貯水して下流水路の安全を保ちます。通常は洪水調整機能を阻害しない範囲で貯水されており、ゴルフ場内外の美しい水辺景観を形成しています。

合流幹線水路（神戸市西区神出町東ほか）

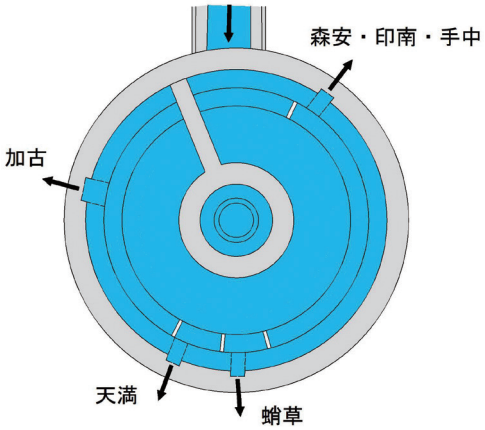
老ノ口分水所から下流に延びる合流幹線水路（神戸市西区神出町東）

集落を通過する合流幹線水路（手前下流：神戸市西区神出町紫合）

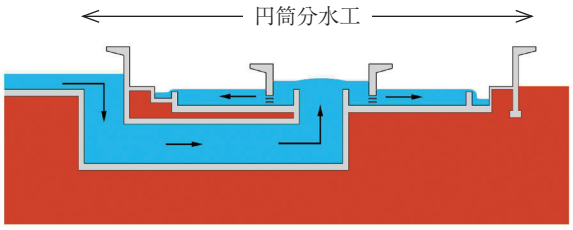
淡河川疏水の完成後に山田川疏水が開削され、山田頭首工に始まり宮ヶ谷調整池の上流で淡河川幹線水路に合流する山田川幹線水路ができました。この時から、宮ヶ谷調整池から練部屋分水所までの淡河川幹線水路は、合流幹線水路と呼ばれるようになりました。

練部屋分水所（神戸市西区神出町紫合）

下流側からの全景・右後方は雌岡山



見取り図（平面）



見取り図（断面）

合流幹線水路末端の練部屋分水所では、加古郡稲美町内各地のため池につながる支線水路に分水されます。最初は淡河川疏水開削時に造られた四角形の分水工でしたが、完成直後に水害により破損したため、復旧工事により六角形の分水工となりました。その後、昭和 24（1949）年から昭和 36（1961）年にかけて実施された県営大改修工事により現在の円筒分水工になり、円筒の中心から湧き出る用水は静かな流れに制御され、一定の比率で正確に分水されます。

ＴＴ（淡山疏水・東播用水）博物館（加古郡稲美町野寺）

博物館全景

第一展示室正面

展示コーナー

ＴＴ（淡山疏水・東播用水）博物館は、平成 27（2015）年１月に淡山土地改良区と東播用水土地改良区が設置しました。手作りの博物館であり、展示資料の選定や説明パネルの作製などは両土地改良区の職員が行いました。所蔵資料は淡山疏水に関する物が多く、展示資料以外は第一展示室二階の資料室に保管されています。来館者は、開館から平成 30（2018）年３月末までに 4,700 人を超えています。受益農家や土地改良事業関係者及び一般の人たちに交り、20 校以上の小学４年生の子供たちも地域学習として毎年訪れています。

山田頭首工跡（神戸市北区山田町坂本）

河川下流側からの全景・床止部が頭首工跡

在りし日の姿

明和８（1771）年に神出東村の某（氏名不詳）が測量した路線を基にして、明治時代に山田川疏水が計画されましたが、工事が困難であるために路線変更されて淡河川疏水が開削されました。その後再び山田川疏水が計画され、大正４（1915）年に山田頭首工が建設されました。山田川疏水の水源施設として永らく機能を発揮していましたが、東播用水事業によって呑吐ダムに統合され、平成４（1992）年に撤去されました。

山田池（神戸市北区山田町衝原）

上流からの全景

下流からの全景

大正 13（1924）年に発生した空梅雨による大干ばつを契機に、山田川疏水の水源が補強されることとなり、昭和 4（1929）年から昭和 8（1933）年にかけて山田池が築造されました。堤体内部の構造は重力式粗石モルタルで、その表面は石積みであり、余水吐や取水塔などの美しいデザインが特徴です。東播用水完成後には淡山疏水の用水も安定し、水源補助の役割を終えた山田池は、淡山土地改良区が合併解散する直前の平成 28（2016）年 3 月に隣接するゴルフ場に売却され、コース管理用水の水源として利用されています。

平木橋（加古川市野口町水足）　掌中橋（加古郡稲美町印南）

前の池に移築された平木橋

公園化された掌中橋

移築前の平木橋

平木橋と掌中橋は煉瓦で壁面を覆った石造の美しい水路橋で、森安支線水路にありました。

平木橋は、加古川市内の受益地脱退による水路の廃止により昭和 25（1950）年からは使われませんでした。東播磨南北道路計画において撤去が検討されましたが、歴史的土木構造物として保存されることとなり、平成 21（2009）年、西に 1 キロメートル程の地点の「前の池」に移築されました。平成 22（2010）年 1 月には土木学会選奨土木遺産に認定されています。

掌中橋は、東播用水地区県営かんがい排水事業によって水路がパイプライン化され、平成元（1989）年頃から使われていません。平成 19（2007）年、稲美町により掌中橋公園として整備されました。

主な支線水路・ため池

1　神出支線水路

手前ボックスは分水観測所（神戸市西区神出町古神）

2　別所支線水路

県立三木東高校グランド沿いの開水路（三木市別所町小林）

3　岩岡支線水路

改築直後の天郷水路橋（明石市大久保 町 西脇）

4　印南支線水路

道路沿いの開水路（加古郡稲美町印南）

5　森安（もりやす）支線水路

集落を通過する開水路（加古郡稲美町岡（おか））

6　天満（てんま）支線水路

道路沿いを走る開水路（加古郡稲美町野谷（のだに））
左の水路は南池（みなみいけ）小支線水路

7　加古支線水路

経ノ池沿いを走る開水路（加古郡稲美町野寺）

8　岩岡５号池

堤防から上流側（神戸市西区岩岡町岩岡）

巻　頭　言

淡山土地改良区合併解散記念誌編集委員会委員長
元兵庫県淡河川山田川土地改良区理事長
大村　哲郎

淡山疏水 128 年史の刊行にあたり、慎んで御挨拶申し上げます。

明治 19 年３月、山田川疏水開削を目的として「播磨国加古郡印南新村外二十箇村水利土功会」が設立され、以後「普通水利組合」として三度の改組を経て、昭和 27 年３月に「兵庫県淡河川山田川土地改良区」となり、「淡山土地改良区」の愛称で親しまれました。

淡山土地改良区は、それまでの組織と同様に明治から大正にかけて開削された淡山疏水を維持管理し、農業近代化や農業経営安定に役割を果たしてまいりましたが、淡山地域を包含した国営東播用水土地改良事業が計画され、昭和 47 年に東播用水土地改良区が設立されてからは、両土地改良区の組織の再編といった課題を持つことになりました。

両土地改良区において、この課題を解決すべく合併を念頭に置いた協議を重ねたものの、淡山疏水の土地･施設と淡山土地改良区の水利開発の先駆者としての評価が問題となり、協議は難航しました。平成７年 12 月となって、ようやく淡山疏水の東播用水土地改良区への管理委託協定が締結され、翌年４月１日より淡山疏水と東播用水の一元的施設管理が開始されました。

その後合併に関する問題はあまり協議されぬまま時が過ぎ、15 年後の平成 23 年５月、両土地改良区は国営東播用水二期農業水利事業の推進と農家負担の軽減を目指した組織統合の協議に入り、平成 24 年６月には「淡山・東播用水土地改良区合併推進協議会」を設置し、慎重審議を重ねた結果一気に合併の機運が高まり、平成 28 年４月１日に念願の合併が実現した次第です。これも両土地改良区の組合員をはじめ、国、県、関係市町及び関係機関の皆様各位の御協力の賜物であり、深く感謝申し上げるところです。

淡山疏水の歴史を振り返ってみますと、新田開発が進められた明治の初期には、干ばつによる凶作や水害に加えて過酷な地租に苦しみ、夜逃げする農家が続出しておりました。そんな中、先人・先覚者たちは農業の発展を図るべく国・県に陳情を重ね、疏水計画を事業化し、血のにじむ努力により膨大な工事費の負担に耐え、明治 24 年４月に淡河川疏水を完成、また、大正４年１月には山田川疏水を完成、大正８年２月には山田川疏水の水を貯水する 62 箇所（地元水利団体が築造したため池を含む。）のため池や支線水路などを完成させました。

これら疏水事業では、西洋土木技術を学んだ新進気鋭の技術者が活躍し、トンネル、水路橋、分水所などが造られました。急峻な地形の谷を渡る御坂サイフォンにあっては、英国人技師ヘンリー・スペンサー･パーマー氏の設計監督の下に、軟らかく展延性のある英国製マイルド･スチールをサイフォン管に使用して難工事が完遂されました。

当時は殖産興業の推進施策も相まって食料増産が図られた時代でもあり、多くの疏水事業が進められましたが、その中でも、農家や英国人技師といった多くの先人たちの努力の結集である淡河川・山田川の両疏水は、優れて農家の経営基盤を安定させ地域産業の発展に寄与してまいりました。

近年では歴史･文化の面からも高く評価され､農林水産省の「疏水百選｣､兵庫県の「近代化遺産」（特

に重要な物件として評価）及び経済産業省の「近代化産業遺産」に淡山疏水が選定又は認定されました。また、視察見学者の多い御坂サイフォンは「土木学会選奨土木遺産」に認定されました。平成26年９月には、世界の約100か国が加盟する国際かんがい排水委員会（ＩＣＩＤ）において、淡山疏水が「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

淡山土地改良区は東播用水土地改良区に吸収合併されましたが、合併を前にして兵庫教育大学大学院教授・南埜猛氏を委員長とする委員会に助言をいただきつつ両土地改良区で提唱した「ＴＴ（淡山疏水・東播用水）未来遺産運動」がますます盛んとなり、「淡山疏水と東播用水の利活用と新しい水文化の創造」が進むとともに、淡山疏水の歴史がより多くの人々に末永く語り継がれることを願ってやみません。

刊行によせて

兵庫県知事　**井戸　敏三**

このたび、淡山土地改良区が解散され、東播用水土地改良区に合併されるにあたり、その歩みをまとめた記念誌が刊行されます。心からお喜びします。

“いなみ野台地”を豊かに潤す淡山疏水（淡河川・山田川疏水）。前身となる「水利土功会」の時代を含めた130年間にわたり、その淡山疏水の建設と適正な施設管理に力を注いでこられたのが淡山土地改良区の皆様です。また、国営東播用水土地改良事業にも参画されるなど、東播磨のさらなる水源涵養と地域農業の発展に大きく貢献してこられました。歴代理事長をはじめ、組合員の皆様の真摯な取り組みに心から敬意と感謝の意を表します。

万葉集にも詠まれた“いなみ野”の地は、水源に恵まれない自然条件のなか、古くから人々が山林原野を拓き、ため池などをつくりながら農村社会を営んできました。そうしたなかで、疏水事業の構想が発意されたのは、江戸時代中期1700年代後半頃だといいます。その後、古い水利慣行や技術的な問題から何度も検討が繰り返され、ようやく着工に漕ぎ着けたのが1888年。そして、自然災害や用地調整など幾多の困難を乗り越え、さらに30年の歳月を経た1919年に完成に至りました。淡山疏水は、先人たちが労苦に耐え、知恵と力を結集して成し遂げられた、まさに偉業だといえましょう。

現在、淡山疏水による水の恵みは、安定的な水稲生産とともに、トマトやキャベツ、いちごなど、多彩で付加価値の高い野菜生産を実現させ、いなみ野台地を県内有数の農業生産地帯へと発展させています。また、淡山疏水とため池群が織り成す水利システムは国際的にも高い評価を受け、平成26年には「世界かんがい施設遺産」にも登録されました。

近年、農業を取り巻く社会情勢も大きく変化しています。人口減少・少子高齢化やライフスタイルの変化、世界市場の拡大が、新たな食へのニーズを生み出しています。日欧EPA交渉の妥結やTPP11の大筋合意など、世界的な経済連携が加速するなか、さらなる産地間競争の激化も予想されます。また政府においても、農地の集積・集約化や農林水産物・食品の輸出倍増、米の生産数量目標の見直し、農協・農業委員会改革など大きな構造改革を伴う取り組みも本格化しています。

時代が大きく動き出した今こそ、大都市近郊の立地や多様な自然環境など、兵庫の強みを最大限に発揮して、これからの時代に相応しい力強い農業基盤を確立していかなければなりません。

折しも今年は県政150周年、兵庫の新たな飛躍のとき。淡山疏水の歴史と伝統を受け継ぐ東播用水土地改良区の皆様には、農業を活かした兵庫づくりの先導役として、大きな期待を寄せています。これまで培ってきた経験と技術、信頼のネットワークを活かして、さらに充実した活動を展開していってください。

東播用水土地改良区の今後ますますのご発展と、組合員の皆様のご健勝でのご活躍を心からお祈りします。

記念誌刊行に寄せて

稲美町長　**古谷　博**

淡河川疏水が着工された明治21年から128年を経た平成28年4月1日、淡山土地改良区は東播用水土地改良区と合併し組織の合理化を果たされました。この度その記念誌として『淡山疏水128年史』が刊行されますことを心からお喜び申し上げます。

「いなみ野」台地では、江戸時代に入る頃から新田開発が盛んとなり、干ばつや水争いが頻発し、新しい水源が求められていましたが、江戸時代後期の明和8年、八部郡の山田川中流から神出庄東村の雌岡山の南面山麓まで引水する疏水が立案・測量されました。

これが淡山疏水の発端です。その55年後、加古郡国岡新村の福田嘉左衛門が練部屋まで水路を延長した計画書を作成し、姫路藩に開削を出願しましたが実現せず、明治時代となり地租改正による酷税に苦しむ中、畑地から水田への転換による収益拡大を図り、加古郡野寺村総代であった魚住完治が中心となって再度の測量・設計を行い、明治11年、完治外関係5か村の総代が連署して疏水開削の請願書を県に提出し、ようやく着工に向けた運びとなりました。

その後に関係村は増加し、工事推進母体として加古郡印南新村外二十箇村関係水利土功会が結成され、この土功会が政府や県当局の支援を受けて莫大な工事費や難工事などの困難を乗り越え、現在の稲美町のほぼ全域と加古川市及び三木市の各一部を受益地域とする淡河川疏水を完成させました。また、大正時代には、水利土功会から発展した兵庫県淡河川山田川普通水利組合が受益地域を神戸市西区及び明石市の各一部地域にまで拡張した山田川疏水を完成させました。

このようにして開削された淡山疏水は、「いなみ野」台地を潤し続け、かつては新田開発による営農の拡大を支え、現在では農業経営の近代化・安定化、更には水辺景観の形成など、多面的な役割を果たしています。

稲美町においては、「人と緑のホームタウン　いなみ」を基本理念とした第5次稲美町総合計画の後期基本計画を定めて各種施策を進めていますが、農業の6次産業化の推進、水辺空間としてのため池利活用の推進などは、淡山疏水を必要不可欠としています。

また、淡山疏水は世界かんがい施設遺産に登録され、その歴史・文化的価値が高く評価されていますが、稲美町内に設置された「ＴＴ博物館」においても、一般住民や児童等の歴史・農業・自然の学習などに活用され、淡山疏水とともに地域の宝となっております。

最後になりますが、淡山疏水を開削し、守り続けてこられた代々の皆様に深く感謝申し上げます。また、淡山疏水を引き継がれる東播用水土地改良区には、疏水管理に努めていただきますようお願い申し上げますとともに、ますますご発展されますよう心からお祈り申し上げます。

淡山疏水 128 年史刊行に寄せて

近畿農政局長　**新井　毅**

東播用水土地改良区におかれましては、昭和 27 年に水利組合から改組された兵庫県淡河川山田川（淡山）土地改良区とともに、これまで東播磨地域における農業振興の発展に多大なご尽力をいただきました。そして、平成 28 年 4 月に組織合併してその役割を引き継ぎ、ここに淡山疏水 128 周年を迎えられました。これまでの歴史や事業の歩み、合併解散された淡山土地改良区の足跡を後世に伝えるため、ここに記念誌を刊行されますことを、心よりお慶び申し上げます。

さて、淡山疏水の受益となる「いなみ野台地」は、加古川など周辺河川より標高が高いことから、わずかな水を求めて多くのため池が築造されてきました。そうした中で、疏水事業の構想は江戸時代中期 1771 年まで遡ると言われています。明治に入り、人々は生活を大きく転換するため、地域自らの発意により知恵や工夫をこらし、労苦に耐えて明治 21 年から大正 4 年にかけての淡河川・山田川疏水事業（淡山疏水）を完成させて、長年にわたる悲願を達成しました。

戦後、食料増産として、当地域においては、水田の収量増を図るべく、更なる水不足に対応した大規模な水利開発が計画され、昭和 45 年度からは国営東播用水農業水利事業を開始し、呑吐ダムを始めとする 3 ダムや、導水路・幹線水路の建設とともに、淡山疏水の一部改修も含め、ため池を包括する壮大な水利ネットワークが構築されました。そして、淡山土地改良区と貴土地改良区は広域な受益地に適切に用水を配分するためにお互いに連携し、上下流での受益、施設に対して 2 元管理体制を構築、その後、更なる適切な管理体制を求めて協議を加速され、組織合併に至りました。この出来事は、東播磨地域における農業用水の安定供給にとっては画期的なことであり、明治、大正、昭和の壮大な水利システムは、国の総合管理と連携して更に強固になったと言えるでしょう。淡山疏水から東播用水へ新たな水利システムへの移行という歴史的にも極めて重要な体験をされ、地域農業の発展に貢献されました歴代の役職員の皆様、組合員の皆様に対し改めて敬意を表する次第であります。

平成 25 年度からは国営東播用水二期農業水利事業として、老朽化した水利施設の更新とともに地域の営農変化に対応した農業用水再編を進めており、上部が宅地等で陥没の危険がある淡河川と山田川疏水区間では、これを閉塞して一本化し新たな水路トンネルを築造するなどの整備も行っています。江戸期の疏水構想から 150 年かけての明治・大正期の疏水完成、そして更に 100 年近く経過して尚、新たな疏水としてリニューアルし、その役割を引き継ぎ維持していくことが、地域農業に加え、先人の功績を語り継ぎ、次世代につないでいくことになります。現在、当地区では、農業水利施設の整備と適切な保全管理により、水稲作に加え、酒米の山田錦をはじめ、ブドウ、キャベツ、トマトなどの栽培が盛んであり、ブランド化、６次産業化への取組も行われており、都市近郊の立地条件を活かした農業が展開されているところであり、地域農業が更に発展していくためにも、引き続き、事業を着実に推進していく所存です。

さらに、世界かんがい施設遺産である淡山疏水は、明治期の淡河川疏水は煉瓦、大正期の山田川疏水はコンクリートブロックといった材質の特徴に加え、サイフォン、水路橋など貴重な水利遺構が数多く残り、地域に親しまれています。これらを次世代に継承するための広報・啓発の取組として、貴土地改良区におかれましては、合併前から、「淡山疏水･東播用水（ＴＴ）未来遺産運動」を立ち上げ、様々な活動をされています。この取組が、組合員のみならず、地域や関係機関と連携して更に発展していくことを期待しております。

最後に、本記念誌の刊行に携われた方々に心から敬意を表するとともに、貴土地改良区の益々の御発展と関係各位の御健勝を祈念して、刊行の祝辞と致します。

淡山疏水 128 年史の刊行に寄せて

衆議院議員　**西村　康稔**
（兵庫県土地改良事業団体連合会　会長　休職中）

平成 28 年 4 月 1 日、兵庫県淡河川山田川土地改良区は東播用水土地改良区との合併により解散となりました。128 年の歴史に幕を下ろした関係者は寂しさを感じつつも東播用水に引き継がれる有形無形、数々の事象に思いを馳せたことでしょう。永きにわたり地域を支えていただき誠に有り難うございました。

淡山疏水の歴史は県政 150 年にほぼ重なり、明治、大正、昭和、平成と 4 代に亘り地域の維持発展を支えてきました。

明治の地租改正や安い綿花の輸入事情から、先人が水源を求め遠隔の地から山を穿ち川を渡し、いなみ野台地まで水を導き、綿花栽培の畑作から水田への経営転換を可能にしました。田園風景は畑地から水田へ変貌し、そして全国有数のため池地帯が形成されました。このことは生活や文化さらには経済面にも大きな影響を与えました。このような「淡山疏水」は、県政の柱の一つとなっている「いなみ野ため池ミュージアム構想」の中心となる重要な地域資源に位置づけられています。

近年の主な歩みをたどれば、昭和の高度経済成長期に農業用水と都市用水の高度利用対策として、淡山疏水事業を拡大発展させた第 2 の加古川と言われる国営東播用水事業が昭和 45 年から始まり、事業完了後、平成 8 年には東播用水土地改良区のもとで水利の一元管理が実施されました。

平成の時代には、淡山土地改良区所有の水路・トンネル等を含め再整備する東播用水二期事業が始まり、施設の一本化が成り両土地改良区の完全合併が可能となりました。

合併に至る間には国、県、市町、その他多くの関係機関の指導助言をいただきましたが、取り分け淡山の果たしてきた役割を顕彰し後世に引き継ぐ「ＴＴ未来遺産運動」には、本連合会としましても更なる行政のご支援を強く願っております。

結びに、今回の記念誌は前回の『百年誌』に続く淡山土地改良区の最終完結編を意味し、編集刊行に尽力いただいた方々に敬意を表し祝辞といたします。

刊行によせて

兵庫教育大学大学院教授　**南埜　猛**

『淡山疏水 128 年史　疏水開削～未来創造』の刊行を心からお祝い申し上げます。

淡山疏水（淡河川山田川疏水）は、「安積疏水」、「那須疏水」、「琵琶湖疏水」とともに日本四大疏水の一つであり、また時には「安積疏水」、「那須疏水」、「明治用水」とともに明治期の日本四大農業用水の一つとして称され、日本を代表する水利事業であります。

本年は兵庫県政 150 周年の年です。日本は 150 年前、明治維新を経て、新しい時代に入りました。本書で示されるように、その新しい時代が淡山疏水の実現の重要な鍵となっています。淡山疏水の主な水源地域は明石藩であり、受益地域は姫路藩、さらに幕藩体制下の東播磨地域は多くの藩領が錯綜しており、その水利調整は極めて困難でありました。実際に江戸時代にも開削の計画や申請がなされましたが、いずれも実現できませんでした。それが兵庫県の成立により可能となったのです。またこの 150 年の歴史は近代化の歴史でもあります。近代化の初期の段階は西洋技術が大きなインパクトを与えるものであり、淡山疏水においても当時最新の技術であった軟鉄管（マイルドスティール）をイギリスから輸入することが、その水利事業実現のための必要条件でした。そして、その後も、その時点での最新の技術や知恵がこの疏水に注ぎ込まれ、そして受け継がれてきました。一方、淡山疏水の管理団体は、兵庫県母里村外四箇村普通水利組合に始まり、その後継である兵庫県淡河川山田川土地改良区は 2016 年 3 月に幕を閉じ、東播用水土地改良区にその歴史と施設の管理運営が引き継がれております。

歴史の「歴」は「過去に起こった事柄」を意味し、一方「史」は「文書・記録」を意味します。淡山疏水にかかわって、様々な事柄が起こってきたわけですが、それら「歴」のほとんどは忘れ去られてしまいます。これまで『淡河川疏水工事の顛末』、『山田川疏水事業沿革誌』、『淡河川山田川疏水五十年史』、『淡河川山田川疏水史（創業 77 周年）』、『兵庫県淡河川山田川疏水百年史』として記録し、「史」が刻まれてきました。『兵庫県淡河川山田川疏水百年史』において、執筆・監修の依頼を受けた白井義彦兵庫教育大学教授の構想は残念ながら受け入れられませんでした。その構想は『愛知用水土地改良区五十年の歩み』とその姉妹編として編纂された『愛知用水土地改良区「研究編」』によって、土地改良区史の一つのモデルを示されています。

本書『淡山疏水 128 年史』も、土地改良区史として、モデルとなるユニークな編集と構成がなされています。百年史においては五十年史を影印で再録し、一冊で開削当初からの歴史が通観できるよう配慮がなされています。本書でもその伝統が継承され、五十年史、百年史の一部が収録され、本書だけで淡山疏水の歴史が通観できます。また五十年史の部分は新たに翻刻され、文字も常用漢字が用いられ読みやすくなっています。そして百年史からの 28 年間については、国営東播用水事業の完成前後から兵庫県淡河川山田川土地改良区と東播用水土地改良区が統合されるまでの歴史です。地域の活性化や新しいまちづくりが注目される中、適切に地域を終わらせるという「お開き」のあり方が模索されています。兵庫県淡河川山田川土地改良区はその幕閉じにおいて、実にみごとな「お開き」をなされたことが分かります。それは大村哲郎理事長をはじめ歴代の理事長、諸役員の皆様のご尽力と組

合員の皆様のご理解の賜物であろうと思います。なぜ「史」を残すのか。それは将来に遺恨を残さないためであります。本書はそれを担保するものであり、歴史を永く後世に伝える大きな役割を果たすものとなっています。

また兵庫県淡河川山田川土地改良区は東播用水土地改良区とともに、「TT（Tanzan　Toban）博物館」というレジェンドを残されました。TT 博物館には、江戸時代から今日までの貴重な文書・資料が保存されています。今後は、日本の近代化における農業水利や農村社会を研究する聖地として利活用されるのではないかと思います。その中で、淡山疏水の研究が進展するとともに、故魚住早苗氏が構想された『淡山疏水誌』が編纂されることを強く期待いたします。

東播用水土地改良区に引きつがれた淡山疏水の受益地域の農業・農村の持続的発展とともに、豊かな自然環境と安全・安心を維持する社会環境が行く末永く存続し発展することを祈念いたします。最後になりましたが、本書の刊行にあたり執筆と編集に尽力された多くの関係者の方々に対し深甚なる敬意を表するものであります。

挨　　拶

東播用水土地改良区理事長　　**大村　伊三夫**

兵庫県淡河川・山田川土地改良区と東播用水土地改良区は、平成22年頃から国営東播用水二期農業水利事業の着工を目指していましたが、二期事業を契機としてより効率的な組織と用水管理を実現させることとなり、平成24年に合併協議を開始し、平成28年4月1日付兵庫県知事認可を経て合併いたしました。この間、国及び県関係ご当局にはご指導・ご支援を賜り、大変なご苦労をおかけいたしました。ここに厚く御礼申し上げます。

合併に際しては、単に組織と用水管理の効率化だけではなく、約130年の歴史に名を刻まれました淡山の先輩諸氏の偉業とその成果である歴史遺産として評価の高い淡山疏水を東播用水土地改良区が引き継ぐという重責を負うこととなりました。

東播用水土地改良区といたしましては、淡河川・山田川疏水と東播用水を一体として組合員の需要に応じた高度な用水管理に努めるとともに、これらを100年後の世代に引き継ぐ「淡山疏水・東播用水未来遺産運動」に取り組み、用水を基軸とした地域との協働のもとに、地域産業の発展はもとより農業水利施設の多面的機能の発揮や歴史文化の継承を進めるなど、地域からより一層期待される土地改良区の役割を果たして参る所存でございます。

本誌の刊行は、淡山土地改良区において合併解散の記念誌として計画され編集が開始されたものです。元淡山土地改良区組合員の記憶にとどめるばかりではなく、多くの皆様に淡山疏水と東播用水を知っていただく貴重な資料としても期待され、今後の東播用水土地改良区の運営を円滑に行なっていく上でも重要なものです。

最後になりますが、編集にあたられた淡山合併解散記念誌編集委員会の皆様に心からお礼を申し上げるとともに、合併により新たな旅立ちをした東播用水土地改良区に対する行政並びに地域の皆様のご指導ご鞭撻ご支援を引き続いて賜わりますことをお願い申し上げ、挨拶とさせていただきます。